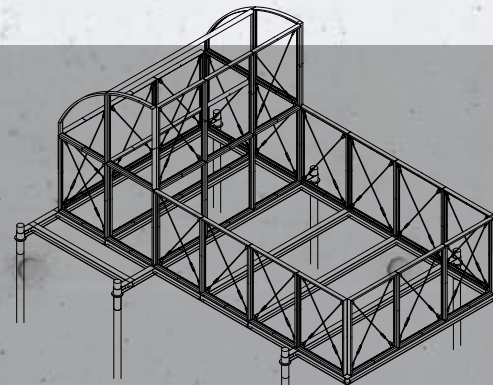




階段を上ると、そこには視界に広がる海と水平線と、余分なものが視界に入らないBBQスペースが設けられた木製デッキがあります。まるで航空母艦の飛行甲板のように、イメージはそこまでも飛翔します。



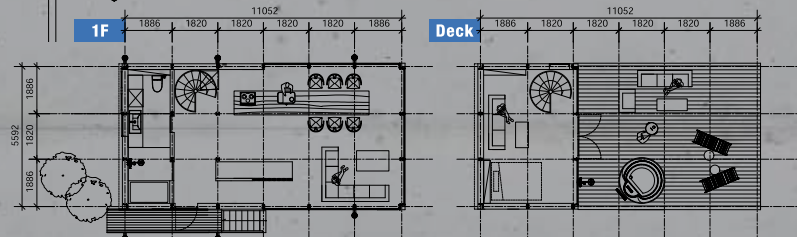
かつてLDKの連載企画「クルマ居住学」のなかで2000年カーマガジン269号に掲載されたフローティングハウス。当時も反響が大きかったのですが、今回高床工法の進化で実現可能になりました。左の写真は鋼管杭の上にまわした鉄骨土台。まるでトラックのシャーシのような考え方です。



フローティングハウスの骨格アウソメ図。鋼管杭と鉄骨土台に着陸したサンダーバード2号のようなボディの様子がよくわかります。大きなガラス開口はこのフレームを利用したスチールサッシで設定したい。アルミサッシのチープな素材感を出したくないですからね。

FLOOR PLAN

平面プランはいたってシンプル、使い方によってどんなふうにも設定可能。キッチンと一体になった大テーブルを空間の中心にしています。夜は波の音を聞きながらここで仲間と語らうのもいいですね。地上から上昇した不思議な浮遊感をどうぞ。



×
28
||

Theme

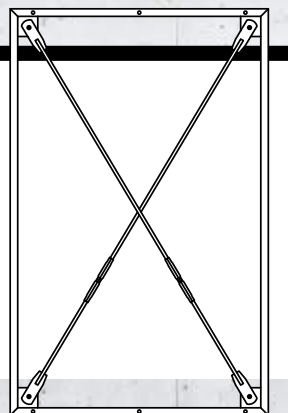
長い歳月をかけてついに実現可能となった 浮かぶ家『フローティングハウス』

まるでサンダーバード2号のような家、フローティングハウスがついに実現可能なカタチとなりました。

キーワードは前回連載と同じ、高床式工法『Spiky-LGS』です。

What's Daytona House?

デイトナハウスを構成するのは、LGSと呼ばれる軽量鉄骨のパネルで、厚さ3.2mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅180cm、縦270cmの長方形に溶接して製作しています。対角線のクロスしたパーツは、「ブレース」と呼ばれる筋違いで、力の伝達を受け持つ大切な役割を持っています。「柱」と「梁」と呼ばれる縦と横の部材を使って軸組を作っていく一般的な建築とは違って、デイトナハウスはこのLGSパネルを連結することで住宅、ガレージ、別荘、店舗、マンションなどの様々な建築を可能とする、全く新しいカタチのシステムなのです。つまりこのLGSパネルを使った建物全てがデイトナハウスと言う訳です。パネルの枚数を数えるだけで、建築の広さ、およその予算がイメージできる分かります。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感が醸し出すハードボイルドな空間のテイストも持ち味です。



全てのデイトナハウスで使用しているLGSシステムは18年の施工実績と開発プロセスを重ねてきたものです。かつて、カーマガジン誌での連載企画「クルマ居住学」の中でも、LGSシステムを使用した仮想プランを取り上げていました。なかでも特に好評であったのが、このサンダーバード2号の様な形状の「フローティングハウス」。しかし、その当時はまだ実現可能性が実証されていない仮想プラン、いわゆる夢のカタチでありました。しかし前号でもご紹介した先端羽根付きの鋼管杭を使用した高床式平屋「スパイキーLGS」を使用すれば、

この夢のプランが実現できるということが明らかになってきたのです。そこで今回のプランでは、海沿いのウイークエンドハウスをイメージしてみました。後ろが山、道路を挟んで海がある。日本列島は、このような海岸線に囲まれている形状の立地が多いので想像しやすいのではないのでしょうか。プランはいたってシンプルです。1FにLDKと水まわり、階段を上ると、そこには広いスペースが。道路沿いの敷地なので、仲間が集まってBBQをするデッキスペースは、地面から約4.5m上がった空中に設定します。余分なものが視界に入らず、海を眺めながらの仲間との語らいは、都会生活で忘れていた時間の流れを思い出させてくれるでしょう。高床式は独特のフォルムに愛着が湧くだけでなく、コスト面でも大きなメリットを生み出します。なにしろ基礎工事が少ないのですから。つまりコンクリートを一切使わないで建築できるということです。延べ床面積21坪（3スパン×6スパン+3坪。なるべくシンプルに設計していけば、おおよね坪当たり60〜65万で建設可能です。個人所有だけでなく、仲間と共有で作ってもいいですね。

INFORMATION LDKinc.

デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。

代表: 玉田敦士
WEB: www.ldk.co.jp
TEL: 03-6228-4933

DAYTONA HOUSE OFFICIAL HP
www.daytona-house.com

Text/Atsushi TAMADA CG/Shin MATSUMOTO Illustration/Minori BAN (QuhanCO.LTD)